

ノイエスだより

ノイエス朝日
(朝日印刷工業株式会社)

群馬県前橋市元総社町73-5

TEL 027-255-3434

FAX 027-255-3435

https://www.neues-asahi.jp

Communication House
NEUES
ASAHI

ワールドベースボールクラシック(WBC)を見ていて、久々に気分が高揚しました。マイアミでの準決勝と決勝は録画して見ましたが、予選は日本時間の夜だったので生放送で見ることができませんでした。そこで事件は起きました。中学生の息子が野球のルールがわからない……ということです。冷めた感じで、「なんでルール知ってるの?その方がびつくりだ」と、大盛り上がり試合中に別の部屋に消えていきました。

確かに、私はなゼルールを知っているのだろうか?と考えて、物心ついた頃からシーズンになると父が見る野球中継が強制的にテレビを独占していたことを思い出しました。その頃はテレビは家に一台しかなく、父が野球を見ていたら当然他のものは見られないわけです。兄弟がいる子は昼間でもチャンネル取り合いの喧嘩をしたとよく聞きます。居間ではみんな同じ番組を見て、見なくても音声を聞きながら手遊びをしたりして過ごしたわけです。そこで私は野球の最低限のルールがわかるようになって、なんとなく好きな選手もできたりしました。

私が小学校の頃、野球よりもサッカーがブームになってきて、中学の頃はバスケットボールも流行りだしました。休みの日に公園や道路でキャッチボールするような光景はあまり見られなくなり、みんなサッカーをしていた記憶があります。学校の授業でもサッカーはありましたが野球はありませんでした。クラブなどを揃えるのは難しいし、プレーする前にある程度キャッチボールなどの練習が必要なので、野球は生徒みんなでするには敷居が高いのかもしれませんが、サッカーはボールか、ボールの代わりになる何か一つあれば、難しいオフサイドなどのルールはさておきなんとなく試合らしいものができるので、世界中では野球よりもサッカーをする人の方が多いのも納得です。

今回、WBCの感動を子どもと分かち合えなかったのが残念ですが、かつて「好きなドラマやお笑い番組が見られなくて辛い」と思いながらプロ野球中継を強制的に見させられた結果、自分の興味以外のことを知り、楽しめるようになったことへ感謝することになりました。今の社会、テレビだけではなく様々なことの多様化と個人主義が現実のものとなり、生活の中で嫌なことや苦手なことをしなくて済むようになってきました。それは人間にとって幸いなことなのかもしれませんが、無理強いが精神的にも肉体的にも良くないのはもちろんですが、自分の興味のある方向と別のところに、もしかしたら楽しみの種がある、ということも若い人たちに知ってほしいと思いました。

(橋本)

ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

*四月中旬は、ノイエス朝日は足場を組んで電気工事があ
るため長期休廊しています。他、会期中以外は閉廊してい
ますので、お問い合わせ等は会期中にお願いいたします。

第26回 樺澤健治 作陶展

会期 四月二十一日(金)～二十七日(木)
午前十時三十分～午後六時(最終日は四時閉場)
会場 ノイエス朝日 スペース1・2

平出浮足豊彫刻展

会期 五月十三日(土)～二十一日(日)
午前十時～午後五時
会場 ノイエス朝日 スペース1・2

前回二〇二一年以来のノイエスでの個展となります。
今回も、素材と作家の想いが絡まりあった濃厚な形が見ら
れそうです。会期中、作家在廊予定です。

中島洋一展

〈企画〉

会期 五月二十七日(土)～六月四日(日)
午前十時～午後五時(最終日は午後四時)
会場 ノイエス朝日 スペース1・2

五年ぶりの個展となります。五年間の中でフィクションを
圧倒するノンフィクションが起りました。ただそれは私
にとってメディアによって伝達されたもので生の戦慄はほ
んど感じえない。むしろ少年時代の血を流したり争いを
見たり、死を見たり、私自身の戦慄の原点があるように思
えます。今回の展示は、この五年間に制作した一三〇号を
中心に六十数点展示します。ご高覧ください。

(中島)

本屋さん・図書館めぐり、そして美術館

むかしむかしの話ですが、通っていた幼稚園が市立図書
館の前にあつたので本の匂いが記憶のなかにあります。
その幼稚園と一緒に通っていた幼なじみの家は大きなお屋
敷で室内と続いている蔵の入口には本棚があり、そこには
ディズニーの美しい本が並んでいました。背表紙がキラキ
ラ輝いて見えました。そして大人になり縁あって県内一大
きい本屋さん二十年勤務しました。

そこで毎日あらゆる本を目にするようになります。
大手出版社とも大きなイベントを企画し、吉本隆明、大江
健三郎、水上勉、小川国夫などの作家や新藤兼人、篠田正
浩そのほか多くの映画監督や俳優が来社して講演が毎月
のように開催されました。そのたびに著作が用意されサイ
ン会も実施され、熱のはいった日々でした。

当時から編集の仕事をしつづつ覚えはじめ自費出版や小
中学生用の副読本などの仕事をしていました。印刷会社
は神様のような校閲、校正者がいて電話の向こうから聞こ
えてくる声は優しく、そして丁寧に指導してくれました。

一冊の本が出来上がるまでに、作家がどれほどの労力を
費やすか、そしてどれだけの人に関わっていることか考
えると本の重みを感じます。

本屋さんに並ぶ本、図書館に並ぶ本との出会いは心がワクワク
します。本を読む時間は限られます。わかっていても
本屋さんに行つては一冊買い、図書館に行つては借りられ
る冊数をしつかり借り、心が豊かになった気分になります。

先日まで群馬県立近代美術館で「アートのための場所づ
くり」一九七〇年代から九〇年代の群馬におけるアートのス
ペースとして換平堂ギャラリー、ぐんまアートセンター、
コンセプトスペース、アートハウス、北関東造形美術館と
いう展覧会を開催していました。地域に根ざした文化活動
を支えてきた多くの人々に感動し、そして「今」開催した
意味は今後の群馬の文化活動に力を与えてくれるように感
じました。社会情勢の不安定な時期に最初に削られていく
ような文化活動こそ一番大切にしていかななくてはならない
と思います。人、一人の力は大きなものです。本屋さん・
図書館そして美術館で新しい出会いがあるかもしれませ
ん。

萩原葉子さんが言っていました。

「出発に年齢はない」と。

(T・M)